夢を育てる
DGP
News Letter
令和２年 12 月【第 33 号】

DreamGP
Dream Growing Platform
株式会社ドリーム・ジーピー
【大阪本社】
〒556-0004
大阪市浪速区日本橋西 1-3-19
南海日本橋ビル１F
ＴＥＬ：06-4708-4877
ＦＡＸ：06-4708-4879

【年末のご挨拶】“世界”が試された１年 真に価値あるものとは

歴史を少し振り返ると、今から約１００年前に世界を震撼させたスペイン風邪、中世ヨーロッパにおけるペストパンデミック、比較的近い記憶ではエイズやエボラ出血熱等々、数知れない災厄が襲う中、その度に免疫を獲得し生存を果たした人類が今日まで歴史を紡いで来たことが分かります。

そして今年は、年明け間もなくから新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、今冬はまさにその第３波の渦中にありますが、コロナ禍が人類史上にもたらした大変化について考えてみると、それは端的に、劇的なＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）への引き金となったということではないでしょうか。

ビジネスの現場において、フェイストゥフェイスによる会議や商談（同期型）が常識であったのが、オンライン会議システムを利用したそれぞと一気にシフトし、弊社においても、直接顔を合わせなくても進められる案件（非同期型）については、様々なデジタルツールを用いていつでも関係者間で共有出来るスタイルへと舵を切りました。

また、社会全体のモノ（商品）の流れも「工場→問屋→小売店→顧客」といった常に大量の在庫を抱え、実に52％もの廃棄を余儀なくする従来型システムから、インターネットという社会的インフラの普及によるコト（情報）の大変化により、自分が直接出向かなくとも文房具～大型家具、更には温かい食事に至るまで、あらゆるモノが即座に自宅まで届けられるような時代になりました。

このような中、コロナ禍は、ビジネスにおける本質的な価値が、実は『創造性』にこそあるというのを益々明らかにし、日々の生活においては、『一人ひとりが健康であること』こそが最も重要な価値であることを、今一度気付かせてくれたのではないでしょうか。

弊社においても、今年は、毎月１回のオンラインセミナー企画開催や、時流を鑑みた新たな商品の開発等、更なる試みの一年となりました。

これからも、少しでもよりよい社会を残すため、社員一同、挑戦して参ります。

皆様益々のご活躍とご多幸を祈念し、心からの感謝に代えて。

本当に有難うございました。

株式会社ドリーム・ジーピー
代表取締役社長　荒山元秀

【報告】第８回弊社主催オンラインセミナー『商品開発にかける思い ～「あゆみシューズ」誕生ストーリー～』

今月19日（土）、弊社企画主催第８回オンラインセミナーを開催致しました。

今回は〝「あゆみシューズ」の徳武産業〟株式会社様から、代表取締役会長の十河孝男氏をお招きしてご講演を頂きました。

ニューヨークやシカゴ等、海外からの参加者もある中、昭和32年に綿手袋縫製工場として創業した小さな町工場が様々な出会いの声に耳を傾け、介護シューズシェア日本一となるまでの道のりに聞き入りました。

平成29年の厚生労働省調べでは、転倒や転落によるケガや事故は年間８０００人以上にも及ぶそうです。

〝下りのエスカレーター〟時代 変革の時、時流を読んだ挑戦

十河孝男氏

十河氏が２代目社長に就任したのは、昭和59年、37歳の時。当時は社員15名程で50代以上のベテラン社員により９割以上を大手企業の縫製の下請けとして、経営は安定していたとのこと。

けれども、これからの10年先を見据えた時、社員の反対を押し切って、ＯＥＭ生産へと舵を

（※２面へ続く）

【不定期掲載】その６

『中小企業の３Ｄ進化論』

著者：荒山元秀、島村雅徳、森永浩介
出版社：ライティング
発売日：2017 年 12 月１日

はじめに（※前回からの続き）

ビッグデータの活用が話題になり始めた昨今は、健康機器メーカーの商品に、パソコンやスマートフォンアプリと連動する機能が付加されるようになってきました。将来的に、健康管理のデータが電子カルテと繋がる可能性が大いにあるからです。

しかし義肢装具業界は、なかなかそうした動きが見られません。

私の顧客である海外メーカーは、定期的に日本各地の義肢装具製作所を訪問し、自社商品のレクチャーやアフターフォローを行っています。通訳として同行しながら私が感じるのは「医師の指示に応じて作るだけ」の元気がない会社と「デジタルデータを活かした新しい提案や挑戦をする」活気に満ちた会社との、大きな差です。

義肢装具製作はデジタル化によるメリットが、ひじょうに見えにくい業界です。しかし今後は「デジタル化をしないデメリット」が、ますます大きく、重くのしかかるようになるでしょう。

（※次回に続く）

（※本紙【第 32 号】に掲載の本コーナー、正しくは「その５」でした。お詫びして訂正致します。）

切りました。そしてそれが見事に功を奏し、日本一のシェアを達成するも、その際の経験からOEMビジネスに限界を感じ、これからの時代の流れとこれまでの経営方針との間で模索の日々が続いていました。

偶然がもたらした契機 商品開発、市場調査、業界初の試み

ちょうどそんな折、地元で介護施設を経営する友人から、次のような相談を持ちかけられました。

「お年寄りが転ばない靴を作ってほしい」

「足が棒になるほど探したが、どこにもないんや」

そこで、周囲の猛反対を押し切って、それまでの主力事業を担当者に任せ、2年で500人の高齢者の声を聴く市場調査から始めました。

すると、高齢者には5つの要望があることが分かりました。

「軽量、明るい色、かかとしっかり、転倒しない、安価」

また、想定外のニーズのあることも分かりました。

左右の足のサイズが違う方が少なからずおられ、大抵は大きい方の足に合わせて靴を購入し、小さい方の足を入れる靴には、靴下の重ね履きやつま先に詰め物をするなどして対応しているというのです。それが原因で歩行に無理が生じ、転倒に繋がるだろうことは想像に難くありませんでした。

そこで、片方のみ、左右サイズ違いの靴の製造販売を決意し、商品開発に向けて、新たな挑戦の日々が始まりました。

「業界の非常識がお客様の声」

熟練の靴職人に技術指導を受けるべく、何度も神戸へ足を運び、幾度もの猛反対に合いながら、遂に商品化への目途が立った時、阪神淡路大震災（平成7年1月）が起こりました。

ようやくその1週間後、機械を依頼していた神戸市長田区の会社と連絡がつき、奇跡的に〝生き残った〟その機械は、文句を言わない大切な仲間として現在も本社工場にあり、毎月末に感謝の気持ちを込めて、社員一同でお神酒を奉げているとのことです。

1995年の販売開始当初は低迷していた売上数も、販売方法を変えることで急成長し、2000年には中国の協力工場も稼働し欠品の危機も乗り越えられました。

こうして誕生した「あゆみシューズ」は、徹底的にお客様の声に応える為、パーツオーダーシステムの導入やドイツ人整形靴マイスターによるお客様相談室も設置し、お客様からのアンケート葉書は年間2万通余り、おもてなし課には年間約3000通の感謝の葉書が届くそうです。

地元地域社会との共生 様々な施策

同社は、本社から約1時間の所に物流センターを構え、受注当日の全国配送を支えています。南海トラフ地震を見据えた防災センターは、地域と会社、社員を守る役割を持ち、周辺地域の定期的な清掃活動や年2回の倉庫市開催等、お客様だけでなく地域社会との共生を目指し、更なる実践を続けておられます。

阪神淡路大震災と“生き残った”奇跡の機械

中国の縫製工場（2000年稼働）

ドイツ人整形靴マイスター

防災センター（2020年10月完成）

会社から半径2キロ範囲のごみ拾い

会社周辺の田畑に沿う用水路等の清掃

年2回開催の倉庫市（※本年はコロナにより中止）

【共著の出版から3年を経て】

弊社が足と健康に係る事業に携わって15年になりますが、創業当時のシューフィッターが活躍していた時代、リーマン・ショックにより義肢装具業界等医療分野へ軸足をシフトした経営判断、新潟医療福祉大学大学院修士課程にて、阿部教授のもと、靴医学から解剖学、引いてはインソールの設計、そして一番の研究テーマであった足の3D計測の仕組み作りを学んだこと、ご縁あって介護シューズメーカー様との協業により、世界初の3D足型計測機とシューズマッチングシステムを開発し、全国100ヶ所以上の介護施設を巡ったこと、1300名もの働く女性の足型計測を行い、既成の木型にフィットする人は実は2割にも満たないことを知り、大量生産・大量消費という効率化の成せる業を痛感したことなど、様々な記憶がよみがえって参ります。

奇しくもコロナ禍がDX（デジタルトランスフォーメーション）を加速させ、国連が提唱するSDGs等、益々持続可能な社会が望まれる中、DXへの流れを先見した本ではなかったかと自負しております。

このような流れの中で、3年前に上梓した共著もすでに3刷を数え、読者の皆様には改めて感謝申し上げます。

代表　荒山元秀

【 年末年始休業のお知らせ 】
2020年12月26日（土）～2021年1月4日（月）
※2021年1月5日（火）より通常営業致します